

ドイツにおける子どもの貧困(2)

田畑 洋一

和文抄録: 貧しさの中で育つ—とりわけ社会的、文化的、教育的に刷り込まれた貧しさの中で—ということは、発達リスクを被る可能性を意味する。このリスクは、社会から代償として要求される発達課題を克服する過程で、子どもたちに悪影響を与える。全体として、経済的欠乏状態が文化的・社会的資本の獲得に及ぼす影響により、貧困の固定化が促される。同時に家庭内の社会的・文化的資源が、現在の貧困を克服するためにも、将来の生活における参加機会を分配するためにも、決定的に重要になってくる。本稿は、そうした観点から豊かな国ドイツにおける子どもの貧困について、その長期にわたる影響メカニズムを考察した。

Key Words: 子どもの貧困、社会階層の再生産、ハビトゥス、参加機会

本稿は、前稿(2013年第32巻第1号)に続くものである。周知のように、子どもの貧困は現在だけでなく、未来にも影を落とす¹。この点が大人の貧困と子どもの貧困とが大きく異なる点である。だが、しかし、子どもの頃の不利な経験がどの程度、貧困状況の固定化をもたらすかについては、意見の分かれるところであるが、ここではドイツにおける貧困の固定化と子どもの参加機会を中心に述べてみようと思う。

VI ドイツ国内の貧困状況の再生産

1) 資本

貧困世帯の主な特徴は、経済資本の欠乏である。この欠乏は、一方では身体的な供給不足を引き起こすことが多い。栄養不足や健康状態の悪さの形で、後々まで子どもにマイナスの影響を残す。他方で、消費と自己責任に傾きつつある社会において、資金の欠乏は社会的排斥を意味する。その結果、貧困児童はブランド衣料や電気製品のような、人気のある文明社会商品が得られないばかりでなく、同年代の子どもたちにとっては当たり前の余暇活動へも、非常に限られた範囲でしか参加できない(Beisenherz,2002:77)。この結果、欠乏の中で育つという経験自体、内心に強く刷りこまれ、子どもたちは早くから、自分に低く設定された経済的・社会的可能性の限界をまざまざと見せつけられることになる。

経済的供給不足は、文化資本の獲得と密接に関連している。「家庭の日常生活で何事かを決めるにも余裕のなさや欠乏、節約に左右されるような場合、子どもたちの将来に対する投資についても同様であり、この子どもたちも、いずれまた子の親となる。」(Benz,2008:394)。この現象は、たとえば、幼稚園や保育園への入園、補習への出費、芸術分野やスポーツ分野における子どもたちの個性を伸ばすための出費にも当てはまる。さらに、貧困家族は経済的事情から大半は問題地

区に住んでおり、そのような地区では上記のような活動は、一般的にあまり活発でないため、ますます活動参加が難しくなる(Holz,2008:491)。

教育には縁のない下層出身の親自身にも文化資本はわずかしかない。職業的資格も、日常的な能力も欠けている(Holz,2008:489-490)。後者は、たとえば、家事家計のやりくりや時間管理がすでに手に余っていること、おそらく法制度の情報をよく知らないために、役所と連絡をするにも途方にくれていること、などに現れている(Neuberger,1997:85)。結果的に、親は役に立つ知識も、知識を身に付けるための方法も、子どもたちに伝えられない²。そのような親は同時に、子どもを伸ばすために時間とお金を投資しようという気があまりない。親自身の経験範囲に教育はなく、日常生活に対して教育は二の次になっているからである(Anger/Plünnecke/Seyda,2006:41)。

移住してきた家庭では障害要因として、ドイツ語能力の乏しさがさらに加わる。子どもたちは、たとえば、宿題を親に手伝ってもらうことができないのが普通である。子ども自身にとっても、学校に必要な語学力を満たすのが難しいと感じられる場合が多い³。したがって、このような子どもたちはしばしば下の学年に入れられたり、特殊学校を指示されたりして、常に能力以下の課題しか与えられず、あきらめてしまうことが多い(Diefenbach,2007:222)。就学前の養育機会、たとえば、幼稚園などは、どちらのグループも満足に利用していないため、家族に起因する不足を補う参加機会もない(Anger/Plünnecke/Seyda,2006:41)。したがって、該当する児童はその上の社会層に属する同年代の児童と比べて、はるかにスタート条件が不利であり、教育が進むにつれて、それが学校成績の悪さや教育水準の低さに現れてくる。そして、教育には縁のない層の子どもたちで大学に進学するのは約10%に過ぎないが、一方、その上の階級の進学率は60~80%である(Lange=Vester/Timm,2005:272)。そして、学歴が子どもの後の就業参加機会にとって、決定的な影響を及ぼすのである⁴。

下層に比べて、中間層から貧しくなった親は、出身階層のおかげで文化的・社会的資本水準が一般的に高い。たとえば、施設と連絡を取る時に、実用的で理論的な知識を利用できるので、給付への道が開けやすい(Neuberger,1997:85)。貧困に関連した領域に限らず、健康システムや教育システムについても同様である。また中間層では、子どもの育成の優先順位が高いので、経済的に苦しい時期でさえも教育だけは確保しようとする(Bourdieu,2001:33)。中間層の子どもは、文化資本を幅広く利用できるばかりでなく、両親の社会資本の恩恵も受けている。貧困になったばかりの家族においては、社会的におおむね孤立している下層とは逆に、しっかりした社会ネットワークが存在することが多く、貧困を緩和し子どもたちにプラスの刺激を与えることができる(Neuberger,1997:95)。しかし、貧困状態が続くにつれ、このような側面もしだいに失われていく。そうすると住環境のため、また社会活動参加機会に欠けるため、社会的相互作用にも明らかな限界が立ちはだかるようになる。そうして人間関係も、たいていは身の回りの関係に限られるようになり、子どもたちは、ますます社会空間的に隔離され、役に立つ社会資本を獲得する参加機会は少なくなる(Zander,2008:148)。

全体として、貧困構造を固定化するのには、経済的欠乏状態が絶対条件になるわけではなく、経

経済的欠乏状態が文化的・社会的資本の獲得に及ぼす影響により、貧困の固定化が促される。同時に家庭内の社会的・文化的資源が、現在の貧困を克服するためにも、将来の生活における参加機会を分配するためにも、決定的に重要になってくる。

2) ハビトゥスと子どもの貧困

家庭の資本資源は、あらゆる子どもの初期条件に影響を与える。しかし、資源をどのように役立てるかは、子どものハビトゥスにかかっている⁵。ハビトゥスは第一次社会化が進む間に形成され、その時に子どもの生活条件ばかりでなく、重要関係者たちのハビトゥスも刷り込まれる。その結果、まさに生後数年間に経験した貧困こそが、その後のハビトゥスの状態にとって決定的な影響を持つのである。「子どもが貧困を経験するのが早ければ早いほど、また長ければ長いほど、その子の今日の生活状況、そして将来にかける明日の参加機会に刻み込まれる影響は深刻なる。」(Holz,2008:485)。

貧困児童の日常生活では、社会化の条件が次から次へと行く手を阻む。まず住環境と資金の欠乏のために、この子どもたちは自分の可能性が限られている、という状況に日々直面している。したがって、貧困は貧困児童にとって、まったく問題のない普通の状態である。このような生活状況がハビトゥスに内面化されると、自分の欲求の実現は後回しになり、社会的成功を期待から締め出すような思考回路が形成される(Balluseck/Trippner1998:315-316)。貧困と同時に起こる社会空間的隔離もまた、決定的な重要性を持つ。子どもたちは、すっかり「中流層の特徴である主流価値観から切り離された」環境で社会化される(Zander,2008:88)。そしてあきらめ、不透明な見通し、不安定という雰囲気の中で育ち、居住地区の評判が悪いために、早くから社会的に汚名を着せられる経験をする(Dangschat,1998:124-126)。相互作用の可能性が欠けているために、大半はプラスの経験がないので、自信や自尊心を育む余地も子どもたちにはまったく残されていない。その結果としてやる気がなく、自分の行動力に対して、ほとんど期待していない場合が多い(Butterwegge/Klundt/Belke-Zeng,2008:166)。

だが、貧困の中に育ったからと言って、必ずしも「貧困キャリア」(Armutskarriere)の始まりを意味するわけではない((Röleke,2009:22)。むしろ、いかに子どもたちが貧困を克服するかは、両親により社会化が進められる中で、引き継がれたハビトゥスの状態にかかっている。教育が受けられなかった下層特有のハビトゥスを観察してみると、社会化の環境に似て、阻害要因が多数形成されている。下層において世代を越えて続く参加機会のなさや劣悪な生活条件は、時間と共にハビトゥスとして受け継がれている。それは、たとえば、運命論的な生き方に顕著に現れている。比較的下の階層においては、考えにも行動にも諦めと無力感が常につきまとい、このような感情は、経験した欠乏状態から自分で自由になろうとする、あらゆる努力の芽を摘み取ってしまう。親の問題解決能力の欠如や、親が自分の意見や希望を言えない事実にも、このような傾向を持つようになる(Neuberger, 1997:99)。無力という概念は、とくに子どもの自主性を伸ばし育てることを軽視しがちな、有無を言わせぬ教育様式を通して、子どもに伝わる(Hock,2000:63)。その結果、

子どもたちは自主的に行動のできる個人に成長するのではなく、運命に抵抗せず従う傾向あるになる。比較的下の階層のハビトゥスと同じく特徴的なのは、顕著な行き当たりばったりの傾向である。貧困経験が続く家庭において、必要物資が十分に供給されないことが多かった、または限られた時期にした供給されなかったし、現在もそうであるために、「ここと今」(Hier und Jetzt)に焦点が合わせられている。このような将来に向けた視点の欠如は、刹那的な日常生活の方策や不健康な生活ぶり⁶ばかりでなく、教育における願望の少なさにも現れている(Groh-Samberg/Grundmann,2006:15)。

比較的下の階層では、教育成果を日常生活で経験する機会はなく、したがって、子どもたちにとっても、現実的だとは思われていない。教育にあまり価値を置かず、子どもの成績に対して平均よりも期待が低い結果、なるべく早い就業を選ぶことになる。それに応じて、教育には縁のない親は子どもを伸ばすのに、持てる資金に比して、わずかの時間とお金しか投資しない(Grundmann,1998:165-167)。その結果、ずっと貧しいままである家庭の子どもは、就学する時点ですでに成長の遅れを見せており、たとえば、能力に対してさほど期待しないこと、やる気のなさなど、親から受け継いだ否定的な解釈パターンのために、その後の教育課程においても、もはや遅れを取り戻すことはできない(Zander,2008:159)。教育進路の決定でも、下層の子どもたちは明らかに不利である。親ばかりか教師までもが、階層に見合った教育進路を割り振る傾向がある⁷。その結果、教育に対する期待の低さがたいていは自己達成的予言になってしまい、労働市場においても成功へと切り替える参加機会を減らしている(Bourdieu/Passeron,1971:179)。

目立つのは、おしなべて施設を避けるというハビトゥス素因が、比較的下の階層に見られることであり、アンネット・ラルーはこれを束縛感と名づけている。この感覚は実践感覚と比較できる感覚で、施設というものを自分の生活世界の外に位置づけている。その結果、施設は自分に関係のない権力機構だと見なされ、自分の状況を改善するために利用できないので、フラストレーションの種にしか見えない。このことは教育システムばかりでなく、協会・クラブやケア施設、医療機関等をめったに利用しないことにも現れている(Dravenau/Groh= Samberg,2005:119-121)⁸。

貧しくなった中間層家庭の子どもたちは、下層の同年代の子どもたちと同じように、不利な生活条件に直面してはいるものの、不利を克服するために、比較的有利な家庭のハビトゥス構成を利用することができる。家族史において、長く続く貧困経験がない場合が大半であり、社会における選択肢の幅はおおむね広い。たいていはプラスの生活経験により、日常生活を自主的に処理する自分の能力に、根本的な自信がある。比較的下の階層の施設に対する否定的な態度とは反対に、中間層では請求権感覚が優勢であり、すなわち、制度上の給付に対し、請求権を行使する権利を自然に思う感覚がある(Dravenau/Groh= Samberg,2005:119)。家庭内における社会化は、修業者の美点、文化と自己責任の尊重、明らかな上昇志向といった雰囲気の中で展開される(Bourdieu,1987:206)。したがって、社会における没落にも単純に甘んじず、自分の行動力を信じてなんとでも克服していこうとする(Zander,2008:158)。さらに中間層は下層と異なり、制度や社会の提供する支援をフルに活用することができる。

ハビトゥスに備わった価値観は、励まして育てる教育スタイルに発展し、子どもが自立した人格に育つよう支え、個人の実現参加機会を促進することを主な目的とする(Zander,2008:39-40)。それに沿って中流層の親は、子どもの教育に的を絞って投資し、経済的に緊迫した時期であっても、子どもを余暇活動に参加させようとする。一時的に資本が不足しても、ハビトゥスに備わった上昇志向と労働倫理のおかげで、子どもは克服する力を体得できる(Bourdieu,2001:33)。ゆえに健全な自信と自尊心の発達を促すのは、プラス体験である可能性が非常に高い。

しかし、ハビトゥスの記述は、常に傾向を説明することしかできない、ということをここで強調しておきたい。どのようにして親子の貧困状態が克服されるのかは、各人の個人的生活経験によって決定される。ここでブルデューのハビトゥス概念は、限界に突き当たる。なぜなら、制度の枠組みとなる条件や、該当者の全体的な生活環境がまったく考慮されていないからである。これらの要素は、まさに社会機会再生産過程において、決定的に重要性を持つ。たとえば、独りで子育てする者が貧しくなるのは、大半が以前のパートナーとの別れと関連しており、貧困を構造的に克服しようとしても、このような二重負担に阻まれる。こういったケースが加わって、事態はさらに難しくなる。パートナー関係内でも全般的な欠乏状態により摩擦が起き、さらに子どもを苦しめ、子ども自身を両親の保護という焦点から押し出してしまふ(Grundmann,1998:162、Zander,2008:170)。

それにも関わらず、次のことは確実に認められる。ずっと貧しいままであった家庭の子どもは、ハビトゥス要因のために、子ども時代に経験した貧困状態を長期にわたる不利に転換してしまうリスクにさらされており、そのリスクは貧しくなったばかりの家庭の子どもに比べ高い。後者は文化的・社会的資本の供給を幅広く受けているばかりでなく、生活における参加機会実現に向けて、それらの資本を活用するのに必要なハビトゥスを備えているからである。

3) 政策上の枠組みとなる条件

ドイツのような福祉国家だけではなく、すべての国において、未成年者に対する責任は家庭だけにあるのではない。福祉政策が、子どもたちの生活における参加機会に積極的に影響及ぼすので、子どもの貧困を考察するにあたっては、福祉政策上枠組みとなる諸条件が貧困再生産に及ぼす影響も考慮に入れるべきである。

子どもを対象とする貧困対策の中心的課題には、全ての子どもに対する基礎保障と、「…社会生活ができる人格への…成長促進」(社会法典第8編第1条第1項)も含まれる。物質面での基礎保障に関しては、非常に成果が上がっていると公表した「2005年の欧州所得・生活状況統計調査」によると、ドイツはスカンジナビア諸国と並んで、子どもの貧困率に対する社会保護効果ももっとも大きい国である⁹。しかし、実際には、準備された資金では基本供給を確保できない場合が大半である。原因の一つは、家庭内の実際の使い道を追跡できないことにある¹⁰。一方、児童のための固定費は、ドイツ家庭政策が経済的保護に焦点を当てているため極端に高い。国は国内総生産の3%を家庭関係の給付に費やしてはいるが、現物給付に流れるのはそのうち4分の1に過

ぎないため、子どもの養育にかかる費用や公共交通費の大半は親の手に渡る(BMAS,2008:209)。その上、とくに比較的下の階層は受給権のある給付について十分に情報を得ておらず、たとえば、健康領域では、治療をすべて受けていないといった結果を生む(Beisenherz,2002:350)。

金銭的保護自体も貧しい家庭には十分に届かず、貧困であり続けるよう助長する結果になる。社会法典第2編による受給者は、高額の子童手当から恩恵を受けていない。なぜなら、児童手当は通常基準に算入されるからである(Butterwegge/Klundert/Belke-Zeng,2008:327-328)。2007年1月1日に導入された両親手当のために、失業者および低所得者にとっては状況がかえって悪化してしまった。2年間にわたって支払われる予定だった基本額300ユーロが、1年に短縮されたからである¹¹。所得が自身の需要を満たすのに十分ではあるが、子どもの需要を満たすには不十分な低所得者は、2005年以降最高150ユーロの子童加算を申請できる。ただし、査定制限が厳しく設けられているために、およそ360万人いる潜在的有権者のうち、実際には1%しか援助を受けていない¹²。

貧困政策の実施状況を、自己責任と社会参加への促進という観点から考察してみると、大きな欠陥に気づく。現代の失業者扶助・社会扶助システムは、支援と要求をモットーに掲げているものの、受給期間が長くなると依存性を生み出しており、子どもたちに受動的なハビトゥス構成を形成するという影響を与えている(BMAS,2008)。未成年者は家庭外、とくに幼稚園や学童保育所、学校において文化的・社会的資本を獲得する。したがって、育成システムが幅広く普及し、支払える費用であれば、子どもたちは家庭の資本不足を補い、望ましいハビトゥスを身に付けることが可能なはずである(BMAS,2008:第22章)。しかし、ドイツ国内で提供されている従来の保育施設において、まさに全日保育は非常にまれであり、職員は不足し、貧しい親にはとても手がでない費用である。2007年、3歳未満児に確保された幼稚園の定員は、全児童のおよそ10%に過ぎない。現在、保育園に入園できるのは、潜在的な入園希望者の20%にも満たない¹³。学校のみは著しい改善を見せている。全日教育を提供している小学校の割合は、2003年から2007年にかけてほぼ3倍に増えた(BMAS,2008:98)。しかし、現在実施されている養育、とりわけ基礎教育においては、多種多様な教育概念に欠けている(Röleke,2009:23)。

機会均等の確立は、ドイツ教育システムにおける中心原則の一つである。しかし、実際には、教育システムの構成自体が不利条件の固定化を招いている。まず出身社会階層に従って分類されてしまうために、とくに移住者および下層の子どもたちにとって不利になる。そのような子どもたちはスタート条件が不利なために、小学校から成績の悪さが目立つ。基幹学校では、社会階層が均一なので、教育に縁のない層のハビトゥス形式の再生産が助長され、意欲のある資本の豊かな同年代の子どもたちから刺激を受けることがないので、生徒の能力開発が妨げられる。ここでは、抽象的な学習内容が主であり、どちらかといえば実務的な才能のある子どもたちにとっては理解しがたい。知識への扉を開く方法論が教えられないので、家庭内における文化資源の欠乏はまったく取り返せない¹⁴。そして生徒たちはいつも余裕がなく、自分に対して否定的な自己イメージを固定してしまう(Zander,2008:144-145)。教育システムは、このような傾向を強めてしま

う。なぜなら学校費を捻出するための選択肢¹⁶がなく、たいていの場合、貧困問題を扱うための訓練を受けた職員がいないためである。

住宅地域では、いわゆる支援プログラムの枠内で、国による貧困克服活動が行われる。その中には、家庭扶助および児童・青少年扶助がある。家庭扶助は親を対象にし、貧困状態を克服し日常生活能力を獲得するのを支援する (Holz, 2008:488)。児童・青少年扶助の目的は、未成年者の社会適応を促進し、とくに不利な点があれば、個人的なサービスと給付によって不利を補うことである (Merten, 1998:271)。どちらのプログラムも、貧困の固定化を防ぐのに役立つであろう。しかし、どちらも今のところ、問題地区の全域をカバーするほど広がっておらず、プロジェクトごとに制限されたままで、十分な訓練を受け、資格を持った職員に恵まれないケースが多い。その上、特殊な扶助は費用が集中しすぎると見なされるため、例外的にしか給付されない (Dangschat, 1998:302-303)。

政策上枠組みとなる諸条件は、貧困構造の固定化にとって、むしろマイナスに働く。とりわけ今の貧困政策の焦点は、現存する貧困状態の克服に合わせられているために、児童や家族を対象にした予防プログラムは、わずかししか拡充されない。しかし、そのような予防プログラムが行われたならば、貧困児童のハビトゥスおよび資本資源の改善に決定的な影響を与えるであろう。さらに、各領域をつなぎ合わせ、互いに調整する全体のコンセプトが現在に至るまで欠けている。透明性と明確な構成がないために、貧困期間が長期にわたっている家庭でも扶助をまったく利用していない事実がある (Hiller=Ohm, 2007:48)。

Ⅶ 貧困と参加機会

ドイツ社会は、わが国同様、近代化とグローバル化の時代にあって、貧困層と富裕層の間で広がり続ける溝に直面している。とりわけ子どもの貧困の増加は、平等と機会均等という、広く普及している基本概念に矛盾するため、公に非常に問題視されている¹⁶。ここまでの記述により、子どもの貧困という現象自体もまた、経済的・社会的変革の進行から影響を受けることが明らかになった。労働市場構造や家族構成が変換した結果、貧困が社会に共通する共通課題となっているが、ドイツの福祉政策もこれへの十分な対応ができていない。そして中間層の児童も、貧困の中で育つ児童が増えてきている。

子ども時代に経験した欠乏状況は、子どもたちの現在の生活状態ばかりでなく、成長の参加機会や生活における参加機会にも影響を与えている。不利を経験することで、その後の人生に長期にわたってどのような影響が残るかは、とくに家庭の資本資源とハビトゥス構成によって左右される。この点に関して、貧困構造の固定化を促すのは物質的供給不足自体ではなく、むしろこの不足が文化的・社会的資本の獲得に与える影響であると思われる。したがって、家庭内で社会的・文化的資源を提供できるかどうか、しだいに重要になる。これらの資源を実際に利用できる可能性については、さらに子ども特有の生活状況と、外部の支援が利用できる状況かどうかで決まる。

貧困の固定化に関しては、貧しいままの家庭の子どもは、資本資源が欠けているため、また成長を阻むハビトゥス構成のために、長期間にわたって貧困であり続けるリスクが高いということが確認できる。逆に貧しくなったばかりの家庭の子どもは、文化的・社会的資本資源を幅広く活用することができる。さらにこの子どもたちは、生活における参加機会を実現するために、これらの資源を最大限に活用するのに必要なハビトゥスを備えている。このようなケースでは、制度上の支援が得られれば、貧困構造の再生産はむしろ考えづらい。

しかし、各ケースにおいて貧困がどのように克服されていくのかは、子どもの個人的な生活経験と個性にも因る。ハビトゥスと資源の概念では、このような側面はごくわずかししか考慮されていない。この比較的固定された構造を用いても、グローバル化する世界を動かす力関係について、十分に述べることはできない。したがって、貧困現象を全体的に説明するには、ブルデュー理論だけでは不十分である。この理論は傾向を示すことしかできないので、個人や制度の影響要因を補う必要がある。このような限界はあるものの、ハビトゥスと資本の概念は、貧困過程の固定化を説明する切り口としては、今までで一番きめが細かい。

既述したように、ドイツ福祉政策は、子どもの貧困に対して十分に支援することができない。その結果、不利条件が固定化する見込みはぐんと高まってくる。児童の実際の実現参加機会を長期にわたって改善すること、すなわち、子どもを出身社会階層から切り離すことが、予防的貧困政策の目的である。この点に関して、今まで不足しているのは必要な資金ではなく、資金の効率良い効果的な使途である¹⁷。そのゆえに、各政策領域および各政策レベルを互いに結びつけ、互いに調整するような統一された全体コンセプトが必要となろう。その際、子どもの貧困を複次元の現象と捉えるべきであり、さまざまなアプローチ方法ばかりでなく、対象グループの個人的考察も必要である (Butterwegge/Klunt/Belke-Zeng,2008:305)。

「子どもの貧困防止の効果を持続させるためには、家庭と児童に対し大量の現物給付および育成給付が、また資金給付と納税措置に関しては、家族を対象とした目的の明確な拡張されたシステムがどうしても必要である。このことがヨーロッパ比較により確証されている。」
(BMAS,2008:209)

したがって、子どもたちにとって、成果に満ちた人生のスタートは、物質面の基本的供給が保障されて初めて可能である。これに関連して、子どもに特化した社会文化的最低生活費を保障するために、需要に根ざした基礎所得の導入について、今までに繰り返し議論されてきた¹⁸。

このような最低生活費の水準は、とくに子どもが手にする現物給付に左右される。これらの給付により、貧しい子どもたちが家庭とは無関係に、学齢前も学齢期においても、養育施設や教育施設を利用できるようになり、普通の生活において一般的な文化活動やスポーツ活動に参加できるようになるのが理想である。そうなれば、家庭により条件づけられた社会面、文化面、認識面における欠乏を早い時期からカバーすることができる¹⁹。認められたという経験や社会適応経験

も、プラスの自己イメージや活動を促すハビトゥス構成を発達させるのに役立つ(Hock,2000:72-74)。さらに全国に普及した比較的安価な全日保育の提供により、親の就業参加機会も明らかに増え、その結果、国の調整手当に対する家庭の依存度も減るであろう(Butterwegge/Klunt/Belke-Zeng,2008:314-315)。

貧しくなったばかりの家庭の子どもたちは、枠組みとなる条件を訂正して、生活における参加機会を長期的に改善できるのに対し、貧困状況が固定化してしまった子どもたちが生活における参加機会を得るには、はるかに包括的な対策が必要である。この子どもたちは、よく行き渡った社会的経済基盤の恩恵を、理論上は最大限に受けられるはずなのだが、自分や親のハビトゥス構成のために、十分に活用できていない。したがって、このような人々に対する貧困政策は、諸条件は別にして、思考と行動から始めなければならない(Holz,2006:11)。たとえば、予防診察や幼稚園への登園を義務付けて、諸機関との連絡を避ける思考回路をはずすというようなことである。貧しい親と子どもたちに、成果に満ちた生活を送るのに欠かせない日常生活能力を伝えるために、家庭扶助の拡張も必要であるように思われる。この点について、ガブリエーレ・ヒラー＝オームはいわゆる親子センターを提案する。そこは保育施設と、親のために相談や援助を提供する相談窓口とが、一つ屋根の下に一緒に設置されている(Hiller＝Ohm,2007:49)。保育・教育分野では、特殊な助成提供施設と、貧困に対応する職員の教育により、貧困児童の参加機会はさらに改善できる(Butterwegge/Klunt/Belke-Zeng,2008:171)。

おわりに

子どもが家庭の貧困のために、他の子どもが享受している教育や文化的社会生活を営む機会から排除されるという意味の子どもの貧困は、機会均等の原則から言って許されるものではない。その意味で、子どもの貧困という問題は正義論の問題でもある。しかし、社会の正義という問題は、すべての子どもが同程度の学歴を持つようになることをめざすものではなく、子どもの個人的な可能性に応じ、社会の出身階層に伴う両親の経済的能力に関係なく、最善の援助が得られる状況を造り出すことに関わるのである(田畑2012:55)。子どもたちが自立的で社会に適応した個人に育つことが可能な環境を子どもたちに提供し、次世代の生活における参加機会を可能な限り有利に形成していくことは、ひいては社会自体の利益につながる。若い世代を十分に配慮しない社会は、社会自体の社会的・経済的基盤を破壊していることになる。本稿は、先進国ドイツの子どもの貧困について、とくにハビトゥスと参加機会を中心に、先行研究を踏まえて考察したもののだが、わが国においても、子どもの可能性の芽を摘まない社会を構築していくために、意識的に子どもの貧困を問題にしていく必要がある。

注

- 1 「子どもが貧困状態で育つことは、その子どものその時点での学力、成長、生活の質などに悪影響を与えるだけではなく、それはその子どもが一生背負っていかなければならない『不利』な条件として蓄積されるといふことである。」(阿部2009:24)。
- 2 ブルデュューは家庭の文化資本を、主にその質を基準にして評価している。しかし、その後の研究により、文化資本への門を開くには種類ではなく、方法が子どもの生活上のチャンスにとって決定的である、ということが明らかになった。たとえば、親が習慣的に読書すると、どのようなジャンルの書籍を好むかに関わらず、子どもの学校の成績にとっておおむねプラスに影響する(Georg,2006:126-127)。
- 3 2006年のPISA調査(OECD生徒の学習到達度調査)の結果によれば、移民の成績は平均してドイツ児童を73ポイント下回った。移民2世では、成績の差は95ポイントにも及ぶ。この成績は、およそ2年生半ばの学力に等しい(OECD, 2007:20)。
- 4 単科大学または大学を卒業した人たちに比べ、職業分野の修了証がない人たちは、就業率が31.5%低い(BMAS,2008)。
- 5 しかし、ハビトゥスと資本は互いに再生産し合うので、切り離しては考えられない。
- 6 前稿で述べたように、貧困家庭は経済面とは関係なく、ドイツ平均に比べて食生活がはるかに不健康である。嗜好品および酒類などの嗜好物の消費でも、統計のトップに立っている(Mielck,1998:238-241)。
- 7 労働者では進学先の選択に際して、ギムナジウムを明らかに進められて進学した者は38%しかいない。教師も評価するのに生徒の成績だけでなく、生徒の社会的背景やハビトゥスに刷り込まれた特徴、たとえば、礼儀作法なども考慮に入れる。例としてハンブルクの小学校で実施された調査によれば、教育に縁のない階層の子どもたちは、ギムナジウムへ推薦されるために、大学入学資格を持つ親の子どもたちに比べて、さらに50%上の成績をとらなければならなかった(Geißler,2005:77-78)。
- 8 たとえば、ケルン市の比較的貧困者の多い地区では、4~5歳児の52%が幼稚園の早期発見検診を受けない。親から受け継いだ不健康な生活様式に加え、医師による管理を受けないために、リスクが重なって、子どもたちの安寧を長期にわたって脅かしているという(Röleke,2009:23)。
- 9 平均所得の60%を貧困基準とする相対的子どもの貧困のリスクは、社会保護により34%から12%に下がった(BMAS,2008)。
- 10 貧困状態が固定した家庭の用途は重要である。なぜならば、そのような家庭はハビトゥス構成に基づいて、得た資金を教育や健康な食物に投資せず、むしろ優先順位が低いはずの消費財に使ってしまうからである(Beisenherz,2002:351)。
- 11 この点について連邦政府は、税引き後の所得が1,000ユーロ未満の低所得者に対し、最高100%の代替年金を導入するという案を考慮したが、世界的な財政危機に直面し、相当する法律提案は当面棚上げされている(連邦労働社会省、2008)。
- 12 親の所得は、たいてい査定制限値を割っている。つまり、最低生活費に届かない。そのため、児童手当ではなく、社会法典2巻の給付金に申請しなくてはならなかったのだが、恥ずかしさから、または手続きの煩雑さから、対象者の大半は申請しない。児童加算自体についても、貧困家庭には情報が行き渡っておらず、申請するなどほど遠い状態である(Becker/Hauser,2008)。
- 13 大連立政権は2008年4月、児童支援法を新たに可決した。児童支援法によれば、3歳未満児のための保育施設を2013年に35%にまで増やす予定である。施設の増設期間が終わったら、2013年8月1日付ですべての0~2歳児に対し、保育施設に入る法的請求権が導入される。子どもを保育施設に預けられない親、預けたくない親に対しては、全員に月ごとの養育手当が提供される(BMSA,2008:211-213)。そのため、貧困家庭は養育費よりも金銭扶助を選ぶであろうと予想され、その結果、そのような家庭の子どもたちは、改善された提供の恩恵を受けることができない。
- 14 ブルデュューは、この循環を非常にはっきりと描写している。「システムは、何をシステムが望んでいるか、はっきりとは表現しないので、システムが提供しないものは生徒がすでに習得しているということ、暗黙のうちに要求している…。」(Bourdieu/Passeron, 1971:126)。
- 15 たとえば、無料の給食、遠足のための資金調達システムなどが該当する。
- 16 ケルンの貧困研究者クリストフ・ブッターヴェッグは、南ドイツ新聞のインタビューに答えて、公の貧困論争について次のように発言した。「児童の貧困はすっかり主流テーマに昇格した。…子どもたちに自分の運命の責任を取らせるわけには行かない、子どもたちは尊厳のある貧困者だ。」(Helmes,2008)。
- 17 連邦労働社会省の情報によれば、ドイツが2007年に出費した児童対策費用は705億ユーロである。しかし、75%は家族負担調整への出資に流れた。この調整は、比較的裕福な家庭にとって有利である(BMAS,2008年b:7/22)。
- 18 基礎保障という概念は政治家だけでなく、社会学者にも広く賛同を得ている。それは、児童自身の需要を初めて中心に据えたからである。そのような基本所得が再分配措置、たとえば、高所得者層における夫婦単位課税制度の抑制などによって、費用に関係なくどの程度までまかなえるかについては、議論が

- 続いている(この点についてはたとえば、Butterwegge/Klunt/Belke-Zeng,2008:331-332、Spanier,1998:280、Hanesch,2000:240-241、Bäcker,2000:264、Hauser/Hübinger,1993:422を参照のこと)。
- 19 無料の早期幼児育成プログラムを全国に拡張した社会国家、たとえば、スウェーデンにおいては、貧しい家庭の子どもたちも入学時には、上層階級の子どもたちと同等の認識発達状態にあることが確認されている(Butterwegge/Klunt/Belke-Zeng,2008:336)。

文献

- Anger, Christina/Plünnecke, Axel/Seyda, Susanne 2006: *Bildungsarmut und Humankapital schwäche in Deutschland*, Köln: Institut der deutschen Wirtschaft.
- Bäcker, Gerhard 2000: *Armut und Unterversorgung im Kindes- und Jugendalter. Defizite der sozialen Sicherung*, in: Butterwegge, Christoph (Hg.): *Kinderarmut in Deutschland. Ursachen, Erscheinungsformen. und Gegenmaßnahmen*, Frankfurt a.M.: Campus, S. 244-269.
- Balluseck, Hilde v./Trippner, Isa 1998: *Kinder von alleinerziehenden Sozialhilfeempfängerinnen im Spannungsfeld von Familiendynamik und Armut*, in: flocke, Andreas/Hurrelmann, Klaus (Hgg.): *Kinder und Jugendliche in Armut. Umfang, Auswirkungen und Konsequenzen*, Opladen: Westdeutscher Verlag, S. 309-327.
- Becker, Irene/Hauser, Richard 2008: *Vom Kinderzuschlag zum Kindergeldzuschlag. Ein Reformvorschlag zur Bekämpfung von Kinderarmut*, in: Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung (Hg.): *SOEPPapers on Multidisciplinary Panel Data Research 87*, Berlin: Deutsches Institut für Wirtschaftsforschung.
- Beisenherz, Heinz Gerhard 2002: *Kinderarmut in der Wohlfahrtsgesellschaft. Das Kainsmal der Globalisierung*, Opladen: Leske & Budrich.
- Benz, Benjamin 2008: *Armut im Familienkontext*, in: Huster, Ernst-Ulrich/Boeckh Jürgen/Mogge-Grotjahn, Hildegard (Hgg.): *Handbuch Armut und Soziale Ausgrenzung*, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften, S. 381-399.
- BMAS, Bundesministerium für Arbeit und Soziales (Hg.) 2008: *Lebenslagen in Deutschland. Der 3. Armuts- und Reichtumsbericht der Bundesregierung*, http://www.bmas.de/coremedia/generator/26742/property=pdf/dritter_armuts_und_reichtumsbericht.pdf [Stand 16.10.2008].
- Bourdieu, Pierre/Passeron, Jean-Claude 1971: *Die Illusion der Chancengleichheit Texte und Dokumente zur Bildungsforschung*, Stuttgart: Klett.
- Bourdieu, Pierre 1987: *Die feinen Unterschiede. Kritik der gesellschaftlichen Urteilskraft*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Bourdieu, Pierre 2001: *Pierre Bourdieu. Wie die Kultur zum Bauern kommt. Über Bildung, Schule und Politik*, hg. v. Margareta Steinrück, Hamburg: VSA.
- Butterwegge, Christoph/Klunt, Michael/Belke-Zeng, Matthias 2008: *Kinderarmut in Ost und Westdeutschland*, 2. erweiterte und aktualisierte Auflage, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften.
- Dangschat, Jens 1998: *Sozialräumliche Aspekte der Armut im Jugendalter*, in: Klacke, Andreas/Hurrelmann, Klaus (Hgg.): *Kinder und Jugendliche in Armut. Umfang, Auswirkungen und Konsequenzen*, Opladen: Westdeutscher Verlag, S. 112-133.
- Diefenbach, Heike 2007: *Bildungschancen und Bildungs(miss)erfolg von ausländischen Schülern aus Migrantenfamilien im System schulischer Bildung*, in: Becker Rolf/Lauterbach,
- Dravenau, Daniel/Groh Samberg, Olaf 2005: *Bildungsbenachteiligung als Institutioneneffekt Zur Verschränkung kultureller und institutioneller Diskriminierung*, in: Berger, Peter/Kahlert, Heike (Hg.): *Institutionalisierte Ungleichheiten. Wie das Bildungswesen Chancen blockiert*, München: Juventa, S. 103-129.
- Geißler, Rainer 2005: *Die Metamorphose von der Arbeiterin zur Migrantin. Zum Wandel der Chancenstruktur im Bildungssystem nach Schicht, Geschlecht, Ethnie und deren Verknüpfungen*, in: Berger, Peter/Kahlert, Heike (Hg.): *Institutionalisierte Ungleichheiten. Wie das Bildungswesen Chancen blockiert*, München: Juventa, S.71-100.
- Georg, Werner 2006: *Kulturelles Kapital und Statusvererbung*, in: ders. (Hg.): *Soziale Ungleichheit im Bildungssystem. Eine empirisch-theoretische Bestandsaufnahme*, Konstanz: INK, S. 123-146.
- Groh-Samberg, Olaf/Grundmann, Matthias 2006: *Soziale Ungleichheit im Kindes- und Jugendalter*, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte 26/2006*, 26. Juni 2006, S. 11-18.
- Grundmann, Matthias 1998: *Milieuspezifische Einflüsse familialer Sozialisation auf die kognitive Entwicklung und den Bildungserfolg*, in: Klacke, Andreas/Hurrelmann, Klaus (Hgg.): *Kinder und Jugendliche in Armut. Umfang, Auswirkungen und Konsequenzen*, Opladen: Westdeutscher Verlag, S. 161-182.
- Hanesch, Walter 2000: *Armut als Herausforderung für den Sozialstaat*, in: Butterwegge, Christoph (Hg.): *Kinderarmut in Deutschland. Ursachen, Erscheinungsformen und Gegenmaßnahmen*, Frankfurt a.M.: Campus, S. 220-243.
- Hauser, Richard/Hübinger, Werner 1993: *Anne unter uns. Teil 1: Ergebnisse und Konsequenzen der Caritas-*

Armutsuntersuchung, 2. Auflage, Freiburg im Breisgau: Lambertus.

- Helmes, Irene 2008: *Das Verstummen der Armen*, in: Süddeutsche Zeitung (Online Ausgabe), 04.07.2008, <http://www.sueddeutsche.de/politik/539/302535/text/> [Stand: 25.11.2008].
- Hiller=Ohm, Gabriele 2007: *Kinderarmut bekämpfen. Eine gemeinsame Aufgabe von Bund, Ländern und Kommunen*, in: spw- Zeitschrift für Sozialistische Politik und Wirtschaft 159, S. 48-51.
- Hock, Beate u.a. 2000: *Gute Kindheit- Schlechte Kindheit? Armut und Zukunftschancen von Kindern und Jugendlichen in Deutschland. Abschlussbericht zur Studie im Auftrag des Bundesverbandes der Arbeiterwohlfahrt*, Frankfurt a.M.: ISS-Eigenverlag.
- Holz, Gerda 2006: *Lebenslagen und Chancen von Kindern in Deutschland*, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte* 26/2006, 26.06.2006, S. 3-11.
- Holz, Gerda 2008: *Kinderarmut und familienbezogene soziale Dienstleistungen*, in: Huster, Ernst-Ulrich/Boeckh Jürgen/Mogge-Grotjahn, Hildegard (Hgg.): *Handbuch Armut und Soziale Ausgrenzung*, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften, S. 483-500.
- Lange=Vester, Andrea/Timm, Elisabeth 2005: *Familie und Bildung: Reproduktion in der Krise*, in: Schultheis, Franz/Schulz, Kristina (Hgg.): *Gesellschaft mit begrenzter Haftung. Zumutungen und Leiden im deutschen Alltag*, Konstanz: INK, S. 269-275. •
- Neuberger, Christa 1997: *Auswirkungen elterlicher Arbeitslosigkeit und Armut auf Familien und Kinder. Ein mehrdimensionaler empirisch gestützter Zugang*, in: Otto, Ulrich (Hg.): *Aufwachsen in Armut. Erfahrungswelten und soziale Lagen von Kindern armer Familien*, Opladen: Leske&Budrick, S.79-122.
- Merten, Roland 1998: *Armut als Herausforderung an die Kinder- und Jugendhilfepolitik*, in: Klacke, Andreas/Hurrelmann, Klaus (Hgg.): *Kinder und Jugendliche in Armut. Umfang, Auswirkungen und Konsequenzen*, Opladen: Westdeutscher Verlag, S. 267-287.
- Mielck, Andreas 1998: *Armut und Gesundheit bei Kindern und Jugendlichen: Ergebnisse der sozial-epidemiologischen Forschung in Deutschland*, in: Klacke, Andreas/Hurrelmann, Klaus (Hgg.): *Kinder und Jugendliche in Armut. Umfang, Auswirkungen und Konsequenzen*, Opladen: Westdeutscher Verlag, S. 225-249.
- OECD (Hg.) 2007: *Pisa 2006. Naturwissenschaftliche Kompetenzen für die Welt von morgen. Kurzzusammenfassung*, <http://www.oecd.org/dataoecd/59/11/39731064.pdf> [Stand 10.01.2007].
- Spanier, Wolfgang 1998: *Notwendige Maßnahmen des Gesetzgebers zur Sicherung des Existenzminimums. Lösungsstrategien zur Bekämpfung von Armut*, in: Mansel, Jürgen/Neubauer, Georg (Hgg.): *Armut und soziale Ungleichheit bei Kindern. Über die veränderten Bedingungen des Aufwachsens*, Opladen: Leske & Budrich, S. 274-285.
- Zander, Margherita 2008: *Armes Kind- starkes Kind? Die Chance der Resilienz. Aufwachsen in Armut*, Wiesbaden: VS - Verlag für Sozialwissenschaften.
- 阿部彩(2009)『子供の貧困』岩波新書
田畑洋一(2012)「ドイツの『ハルツIV』と子どもの貧困」『週刊社会保障No.2684』S.50-55.

Poverty of Children in Germany (2)

Yoichi TABATA

Growing up in poverty, especially in socially culturally and educationally imprinted poverty means the possibility to have developmental risks. These risks adversely affect children in the process of overcoming the developmental problems that society imposes them. As a whole, what economical need influences one, when gaining cultural and social capital, accelerates to settle the poverty. At the same time, domestic social and cultural resources are critically important to overcome the current poverty and to distribute the opportunities to participate in the future life. In this paper, from these points of view, we discuss the long term influential mechanism of poverty of children in the rich country, Germany.

Key Words: the poverty of children. the reproduction of the social class. habitus. chance.